杉原千畝に関する教材を用いた道徳科授業

―自他の人権を大切にした行動ができる児童の育成―

佐藤　雅世・上原　秀一

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第９号　別刷

２０２２年８月３１日

杉原千畝に関する教材を用いた道徳科授業†
―自他の人権を大切にした行動ができる児童の育成―

佐藤　雅世*・上原　秀一**
那須烏山市立烏山小学校*
宇都宮大学共同教育学部**

人権教育は、「人権の意義・内容や重要性について理解し、［自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること］ができるようになり、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に現れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにすること」を目標としている。学校においては、各教科、総合的な学習の時間、特別活動、教科外活動等のそれぞれの特質を踏まえ、教育活動全体を通じて人権教育を行うこととなっている。本稿では杉原千畝に関する教材を用いた道徳科授業の実践記録を報告し、人権教育における「具体的な態度や行動」につながる資質･能力を身に付けられる授業の在り方を検討する。

キーワード：道徳科、人権教育、杉原千畝

1．教材

「六千人の命を救った決断―杉原千畝―」を教材として選んだ。これは、佐藤の勤務校で使用している光文書院の教科書『小学校道徳　ゆたかな心　6年』に掲載されている教材である。これを教材として選んだ理由は2点ある。

1点目は、人権的な視点が複数含まれているからである。「人権教育の指導方法等の在り方について［第三次とりまとめ］」で示されている「人権教育を通じて培われるべき資質･能力」と照らしてみると、次の内容と関連していると考えられる。

〈知識的側面〉
- 自由、責任、正義、平等、尊厳、権利、義務等の概念への理解
- 人権の発展・人権侵害等に関する歴史や現状に関する知識
- 自尊感情・自己開示・偏見など、人権課題の解決に必要な概念に関する知識

〈価値的・態度的側面〉
- 人間の尊厳、自己価値及び他者の価値を感知する感覚
- 自他の価値を尊重しようとする意欲や態度
- 正義、自由、平等などの実現という理想に向かって活動しようとする意欲や態度
- 人権侵害を受けている人々を支援しようとする意欲や態度
- 人権の観点から自己自身の行為に責任を負う意志や態度

〈技能的側面〉
- 他者の痛みや感情を共感的に受容できるための想像力や感受性
- 対立的問題を非暴力的で、双方にとってプラスとなるように解決する技能
- 複数の情報源から情報を収集・吟味・分析し、公平で均衡のとれた結論に到達する技能

これらの視点をふまえた道徳科の授業を行うことで、人権教育で育てたい資質・能力の育成につながると考えた。

2点目は、「杉原千畝」が複数の教科書会社で扱われている内容だからである。小学校では8社中4社、中学校では7社中5社が「杉原千畝」に関する教材を掲載している。そのうち2社は、小学校と中学校のどちらにも掲載している。これだけ多くの教科書で扱われている内容なので、この教材を使った提案授業は、応用性の高い実践になると考えた。

† Masayo SATO*, Shuichi UEHARA**: Chiune SUGIHARA in Moral Education Classes
Keywords: Moral Education Classes, Human Rights Education, Chiune SUGIHARA
* Karasuyama Elementary School, Nasukarasuyama
** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
（連絡先:suehara@cc.utsunomiya-u.ac.jp上原秀一）

2. 教師用指導書の展開例の問題点

これまでの授業で参考にしてきた教師用指導書の展開例について検証した。すると次の３つの問題点が見えてきた。

(1) 偏った見方になる

導入で「正義とは何ですか」と問い、主たる内容項目への方向付けを図っている。児童は正義という面から杉原千畝の言動について考えてしまう。また、展開では杉原千畝の思いを考えさせている。命の尊さか規則の尊重かを比べ、命を尊ぶ姿勢を貫いた杉原千畝のすばらしさに共感させる思考の流れになっている。

(2) 物事を多面的・多角的に考えられない

指導書の発問は、葛藤に目を向けさせて多面的・多角的に考えさせようとしている。しかし、葛藤は杉原千畝の内面で起こっていることであり、内面は他者には分からない。多面的・多角的に考えさせるべきなのは、内面ではなく物事である。

(3) 教材の内容を十分に理解できない

教材文を読んだだけでは、当時の情勢や杉原千畝の置かれた状況が捉えにくい。また、歴史や地理に関わる用語が多く、一度読んだだけで理解することは難しい。教材文を読む活動は記されていないが、指導書の展開では一度目を通す程度の時間しかとれない。児童は話の大筋しか捉えられないだろう。

3.提案授業

指導書の展開例の問題点を踏まえて授業を構想した（次のページの学習指導案を参照。工夫した点は次の３点である。

(1) 物事を多面的・多角的に考えさせる

〈ビザの発行〉という物事に目を向けさせる。〈ビザの発行〉で起こり得る結果と、それが良いことか悪いことかを考えさせる。〈ビザの発行〉は良いことであると決めてかからずに、様々な立場に目を向けることで、多面的・多角的に考えられるようにする。しかし、教材だけでは知るべき事実が不足している。関連資料を用意し、多くの事実を知ることができるようにする。

(2) 自力で読み書きさせる

範読と発問はしない。教師による範読、発問によって、児童は分かったつもり、考えたつもりになってしまう。だから「ビザを発行するとどうなるでしょう。できるだけたくさんワークシートに書きましょう。」とだけ指示をする。読まざるを得ない状況、考えざるを得ない状況をつくり、自分でよく読みよく考えられるようにする。

ビザを・・・

発行する	発行しない
(例)　・列車が止まる？ ・ユダヤ人が殺されないですむ。 ・ユダヤ人が助かる。 ↓ ・日本の評価が上がる。 ・幸せに暮らせる。 ・ユダヤ人をすくえる ・ユダヤ人が助かったら、杉原さんは喜ぶけど ソ連の人たちは喜ばない。 ↓ ・日本がきらわれる	(例)　・次の日、晴れる？ ・ユダヤ人→殺される ・杉原さんが退去する。 ・ユダヤ人→安全な国へ向かえない。 ↓ ・ユダヤ人が殺される ・ユダヤ人をすくえないと、日本の評価が下がってしまう。 ・ユダヤ人が幸せに暮らせなくなる。 ・ユダヤ人が逆に日本に戦争をもちこみそう。

(3) 導入と終末を授業時間外に設定する

導入として、事前にビザの写真を教室に掲示しておく。それによって、〈ビザの発行〉という物事に関心を向けさせる。また、まとめ等を行わず、話合いの途中で授業を終える。

終末として、授業後に児童のワークシートを教室に掲示しておく。関連資料も教室に置き、手に取れるようにしておく。それによって、児童の関心や思考を45分間で完結させず、授業後も持続するようにする。

4. 実践の分析と考察

授業で記入したワークシートの内容を分析し、特徴が見られた点から児童の思考について考察した。授業では、38人の児童をＡ～Ｋの11グループに分けた。１グループ３～４名となった。以下の記述においては、例えば「A-10」はＡグループにいた出席番号10の児童であることを表す。

(1) 誤読

次のような誤読が見られた。

A-10：発行する→「飛行機にのれる」 F-28：発行する→「飛行機でどこかに行ける」

ビザを発行してもらったユダヤ人は、飛行機に乗って国外へ移動すると思ったのだろう。

学習指導案

１．主題名　「自分が正しいと思った道を突き進む」とは

（考えられる内容項目）

A 善悪の判断、自律、自由と責任　A 希望と勇気、努力と強い意志

C 規則の尊重　C 公正、公平、社会正義　C 勤労、公共の精神　C 家族愛

D 生命の尊さ

２．教材名　六千人の命を救った決断－杉原千畝－（出典：小学道徳　ゆたかな心　６年　光文書院）

３．ねらい　ビザ発行についてさまざまな視点から捉えることを通して、「正しいと思った道を突き進む」とはどういうことかを考え、実際の場面や状況で意思決定するために必要な道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

４．本時の展開

時間	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	教師の支援、指導上の留意点
20	１．ビザを発行した場合と発行しない場合に起こりうる結果を考えて、ワークシートに書く。 ○ビザを発行すると、どうなるでしょう。 できるだけたくさん考えて書きましょう。	・範読、内容の説明はしない。指示のみを出すことで、児童が自ら教材を読んで考えようとする状況をつくる。 ・ワークシートに、ビザ発行とは一見関係ないように見える例を示しておき、幅広い自由な考えを促す。それによって、教材に書かれていないさまざまな影響にも気付けるようにする。 ・杉原千畝について書かれた本を数冊用意し、知りたいことがあれば活用できるようにする。
25	２．グループで話し合い、ワークシートに書いたことを分類、整理する。 ○グループで話し合って、「良いこと」「悪いこと」「良くも悪くもないこと」に分けましょう。	・グループで話し合いながら内容を吟味させ、一つの結果でも立場によって見え方が変わることに気付かせる。

５．導入と終末に代わる学習活動の工夫

・杉原千畝が発行したビザの写真を前日から教室に掲示しておき、関心をもたせる。

・授業で使ったワークシートを教室に掲示し、授業後も話したり考えたりできるようにする。

６．関連資料として教室に置いたのは次の６冊である。

①杉原幸子、杉原弘樹『杉原千畝物語－命のビザをありがとう―』金の星社（1995）

②あべさより（漫画）、渡辺勝正（監修）『学習まんが人物館 六千人の命を救った外交官 杉原千畝』小学館（2001）

③小西聖一（著）酒寄雅志（監修）『NHK にんげん日本史 杉原千畝－命のビザにたくした願い』理論社（2004）

④白石仁章『六千人の命を救え！外交官・杉原千畝』PHP 研究所（2014）

⑤山田せいこ（漫画）、古江孝治（監修）『コミック版 世界の伝記㉜ 杉原千畝』ポプラ社（2015）

⑥石崎洋司『火の鳥伝記文庫 15 杉原千畝』講談社（2018）

J-14,27,32：発行する
→「そうしきじょうがもうかる」

これはおそらく、発行しない→「そうしきじょうがもうかる」の間違いだろう。ビザを発行してもらえず逃げられなかったユダヤ人たちが殺される。殺されたユダヤ人たちは葬儀場に運ばれて弔われると考えたのだろう。

これらの記述をした児童たちは、現代の自分たちの生活と同じように考えている。国外への移動がどのようなものだったのか。ナチスによって死体がどのように処理されたのか。当時のことを知らないために、誤った考え方をしている。

I-29：発行しない→「杉原さんが退去する」

教材に「そんな中、杉原は、日本政府の命令により、領事館を退去しなければならなくなった。」という文がある。この文は、領事館自体がなくなるという意味にも読める。また、ビザの発行を止めさせるために杉原一人に対して日本政府が退去を命じたとも読める。実際には、侵攻してきたソ連が日本政府に領事館を閉鎖するように言ったのである。教材のこの文は史実と異なる。そのため、史実を知らない児童にとっては誤読を招く表現である。

児童は第二次世界大戦についてまだ学習していない。授業でユダヤ人について学ぶ機会もない。誤読するのは当然である。児童が誤読をしないように、教師が手立てを講じることが往々にしてある。しかし、杉原千畝に関するすべての事実を正確に教えることは不可能である。誤読を防ぐために情報を与えようとすれば、教師の見方に誘導したり、児童の見方を限定したりしかねない。物事を多面的・多角的に見ることができなくなってしまう。

大切なのは、誤読を防ぐことではない。児童が自ら事実を知りたいと思えるようにすることである。授業中、児童から「これって、ビザって、この話でビザを発行した？」という質問があった。教材だけ

では情報が不足しており、考えられることが限られていると感じたのではないか。授業後には、友達のワークシートを見たり関連資料を読んだりしていた児童がいた。関心や思考が持続している様子がうかがえる。自力で読み書きしたこと、授業時間外の導入と終末を工夫したことで、児童はもっといろいろな事実を知りたいと思えたのではないだろうか。関心や思考が持続することで、考えをさらに広げたり深めたりすることができるはずである。

(2) 多面的・多角的な見方

児童は起こり得る結果を様々な立場から考えていた。H-38の児童のビザを発行するとどうなるかを記述した内容について、どのような立場から考えたのかを見てみる。

・どこかへ行けるようになる…ユダヤ人の立場
・安全な国に行ける……　〃
・人がたすかる……　〃
・ばつがくだる……杉原千畝の立場
・ナチス・ドイツがおこる……ドイツの立場
　⇩
・戦争になる！？……日本の立場

ユダヤ人が助かることで起こり得ることへ広げて考えていったことで、ドイツと日本の立場にも目を向けられている。

次に、J-27の児童が記述した内容について、道徳科の内容項目との関連を見てみる。

・ユダヤ人が殺されない…生命の尊さ
・杉原さんの命があぶない
　苦ろうする、六千人が殺されない
　……生命の尊さ
　　善悪の判断、自律、自由と責任
　　希望と勇気、努力と強い意志
　　公正、公平、社会正義
・ユダヤ人に感謝される…国際理解、国際親善
・ばつをうける……規則の尊重

様々な立場からいろいろな結果を考えることで、自然と複数の内容項目に触れることになる。

さらに、日本の評価に関する記述を見てみる。複数の児童が記述しているが、内容に違いが見られる。

C-7,19,22：　発行する→評価が下がる
G-9：　発行する→評価が上がる
F-28：　発行する→評価が下がる
　　発行しない→評価が下がる

「評価が下がる」と考えた児童は、ユダヤ人を迫害しているドイツの立場から考えたのだろう。「評価が上がる」と考えた児童は、ドイツの迫害をよく思っていない他国の立場から考えたのだろう。ビザを発行する方にも発行しない方にも「評価が下がる」と記述した児童は、両方の立場に目を向けていたと考えられる。

児童が考えた起こり得る結果について、その結果は良いことなのか悪いことなのかを検討させた。E-6の児童の記述の一部を見てみる。

・ユダヤ人を助けることができる……良いこと
・日本のきまりを守れない……悪いこと
・ばつをうける可能性……悪いこと
・自分の正しいと思った道を進める…良いこと

これは、すべて杉原千畝の立場から考えた内容である。一つの立場でも、起こり得る結果には良いことも悪いことも含まれている。また、発行しても発行しなくてもそれぞれに良いことと悪いことがある。児童たちは、そのことに気付けていた。良いことか悪いことかの検討は、グループで行わせた。友達の意見を聞いたり一緒に考えたりすることで、より多様な見方が可能となり、気付きにつながった。

範読、発問を行わずに自力で読み書きさせ、〈ビザの発行〉という物事に目を向けさせたことで、児童は多面的・多角的に考えることができていた。このような思考によって、あらゆることを考え尽くしてビザの発行を決断した杉原千畝の意思決定に迫ることができた。

5. 成果と課題

これまでの定型的な授業への問題提起を行い、人権教育で育てたい資質・能力を身に付けられる道徳科の授業について考察した。「物事を多面的・多角的に考える」という視点で授業展開や指導方法を工夫したことで、児童は人権的な視点と道徳的諸価値の両方に触れながら考えを広げ深めることができていた。意思決定の判断材料となる事実をよく知ると

いうことを積み重ねていくことで、実際の生活における様々な場面や状況での問題との向き合い方が身に付き、行動へとつながっていくだろう。

課題は、45分間の授業の中で児童が知り得る事実の量である。授業後も関心や思考が持続することで、児童は自らいろいろな事実と出会うことができるだろう。しかし、授業時間内にもう少し多くの事実を知る事ができると良かった。関連資料の活用方法を工夫することで、それが可能となるだろう。多くの事実を知ることができれば、さらに見方が多面的・多角的になり、考えが深まるはずである。

引用・参考文献

[1] 文部科学省『人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]』(2008)
[2]『小学校道徳　ゆたかな心6年』光文書院(2020)

令和4年4月1日 受理

Chiune SUGIHARA in Moral Education Classes

Masayo SATO, Shuichi UEHARA